新聞小説とは

岸田國士

「新聞小説」についての感想を書けといふ注文である。本紙連載の「泉」をやつと書きをへたところなので、それがどういふものであるにもせよ、自分のことを問題にするやうで気がひけるけれども、経験を経験として率直に語つてみよう。

職業的といふ言葉が当節いろんな意味に使はれてゐるが、私は、「新聞小説」ぐらゐ「職業」といふ意識をもつて書かなければならぬ文章は、ほかにはさうないと思ふ。これは必ずしも「新聞小説」を卑めていふわけではない。そこで「職業」といふ言葉に対する考へ方をまづきめてかゝらねばならぬ。

第一に、新聞がなぜ現在とりつゝあるやうな形式で小説を連載する必要があるのかといふ点である。

第二に、新聞の読者で、小説をも毎日欠かさず、或は気が向いた時だけとびとびに読む人々は、いつたい、どういふ要求から、またどんな読み方で、これらの小説を読むのが普通であるかといふ点である。

以上の二点から「新聞小説」の条件或は制約といふものが生れて来るとみなければならない。

読者層が階級的にも地方的にも極めて広いといふやうなことを第一の条件とする説もあるやうだが、私は、この説をあんまり信用しない。広いには広いに違ひな

いけれども、これはもう、厳密には一人の作者にとつてはどうにもならないことで、せいぜい「調子をさげる」などといふ馬鹿な手が考へられるくらゐなものである。

さて、新聞がなぜ小説などを細かく切つて載せなければならぬかといふ点であるが、この解答は新聞社側にお願ひしたいものである。私はただ想像にすぎぬが、西洋諸国にも例がある通り、これは単に、あまりに現実的な日々の事件の相貌に一脈の空想味を盛り、あまりに険しい活字面の公式的俯瞰のなかに、いくばくのファミリアルなスタイルを与へようとする意図の現れ

ではないかと思ふ。
　文学とジヤアナリズムとの結びつき方に二様ありとすれば、これは正しくその一つで、作家がその「生活」をのみジヤアナリズムに託する純粋派に対して、「作品」自体をまでその機能に合致させようとする応用派に属するものである。
　私一個の見解をもつてすれば、ある新聞の小説と、同紙面との調和不調和といふことはこゝで相当重要な問題になつて来ると思ふ。作者の撰択が常にいくぶんこの標準で行はれてゐるものと判断はできるけれども、作者の側からすれば、それも亦一の制約であり、時に

は拘束でさへもある。

読者はたゞ、今日の分は面白いとか面白くないとかいつて読んでゐればいゝのだが、新聞社の当事者は、検閲などといふことゝは別に、毎日の一回分をはらはらしながら眼を通してゐることだらうと思ふ。それと同様に、作者の立場からは、実を云ふと、自分の書いてゐる間は少くとも、毎日の新聞記事が自分の責任みたいに気になつてしかたがないのである。をかしなものである。

新聞社が作者に対し、いろんな注文を出すといふ風説が行はれてゐる。これは、私の知る限り、まつたく

の嘘ではないが、文字通りの真相でもない。作品そのものゝ価値に影響するやうな注文を、黙つて聴く作者もあるまいが、要するに、新聞小説の条件に関する一般的要求がそこに現はれて来るのは当然で、この条件は、作者自身と新聞社当局とが、その意見を持ち寄らなければ、完全な具体性をもち得ないものと私は信じてゐる。

次に、新聞小説を読む読者の質について屢々説をたてるものがあるが、私の経験ではそれを決定するなんらの拠りどころはないやうである。

寧ろ、新聞小説を読むものが、どういふ要求から、どんな読み方をするかといふ方が、作者として参考になる。

お互に気がついてゐるやうに、新聞の連載ものは、毎日欠かさず読まなければ、その興味はまづ大半失はれると云つていゝ。ところが、毎日欠かさず読む人は、非常な努力をしてか、或は、やゝ習慣になつてゐるか、どつちかである。

私はどつちかといふと、新聞の連載小説といふものを、たゞの一度も通読したことがない。二日続けて読んだものも稀である。読みたいものは本になつてから

読めるといふ安心があるのと、せつかちで物臭と来てゐるから、努力もしないし、習慣もつかないのである。

しかし、読書人として読むものに事を欠かぬ錚々たる私の友人の二三は、どんな小説でも取つてゐる新聞の小説は必ずみんな読むと豪語してゐる。かういふ人々がどんな要求からどんな読み方をしてゐるか、本音を聞いてみたいものだと思ひながら、まだそれを果さずにゐるが、おほかた、察しはつくのである。

その他、投書などによつて推定される一般の読者について、私は常に新聞小説といふものが、いかなる制約があるにせよ、やはり書き甲斐のあるものだといふ

ことを感じさせられる。

しかし特別な場合を除き、全部を書き終へてから発表するといふ当り前なことがどうしてもできない実情と、読者の側からは、一回に限られた僅かの行数を、まる一日の間をおいて読み続けて行かねばならぬといふ奇妙な読書法とを、殆ど無意識ではあるが今日まで多くの作家が、「新聞小説」のひとつの「呼吸」として、生かし、利用してゐることは否めない。

こゝから新聞小説の、即興的とまでは云へぬにしても、やゝ「時間芸術」のあるものに類似した、観念の深さの限界と、文体に必然的に影響するリズムの法則

とが考慮されなければならぬのではないかと思ふ。

強ひて理窟をつければ、まあこんなことになるけれども、だいたい、そんなことは計算づくで書いてゐるわけでもあるまい。文学の諸種目を生みだす制約といふものが、鑑賞者のそれに応ずる精神の働かせ方に基礎をおいたものであるとすれば、特に、例へば、新聞小説の場合に、読者の「記憶力」を強要するといふやうなことは、実際、それをする方が無理なことはわかりきつた話なのである。

新聞小説は、云はゞ、現代の「活字」の暴威のなかに育ち、しかも、印刷術発明以前の「物語」とひそか

に相通ずる一種皮肉な反抗児ではあるまいか？

最後に、拙作「泉」をなが〳〵読んでくださつた読者に、同じ紙面をかりて序にお礼を申したい。鞭撻、助言、批評を与へられた方々にも、いちいち返事はさしあげなかつたが、こゝでご挨拶をしておくことにする。

底本：「岸田國士全集24」岩波書店
1991（平成3）年3月8日発行
底本の親本：「東京朝日新聞」
1940（昭和15）年3月16、17日
初出：「東京朝日新聞」
1940（昭和15）年3月16、17日
入力：tatsuki
校正：門田裕志
2010年1月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。